2024
10
第413号

教区だより

真宗大谷派京都教区 教化広報誌

今、この時に、親鸞聖人に遇う

山城第4組 中村 修司 氏　石西組 前田 素子 氏

レポート

夏中、有志講、高島秋講

今、この時に、親鸞聖人に遇う

荘厳

山城第四組 西念寺住職
中村 修司

法要に応じて本堂内陣・お内仏の掃除をし、仏具を磨き、その仏具を安置し、打敷を張り、お華を立て、お仏飯・お華束等をお供えすることを「お荘厳」といいます。

私は、一般的に「荘厳」というと、「心から形へ」と「形から心へ」の二つの方向性があるのではないかと思います。「心から形へ」とは、「今日は亡くなった大事な方の法事だから、せめて故人の好んだ食べものの一つでもお供えしたい」と思うのが、私たちのきわめて自然な気持ちであります。つまり、故人を本当に思う心は、精一杯の荘厳という形となって表れてくるものではないでしょうか。そして「形から心へ」とは、お内仏にほこりがたまり、お花は枯れたままの状態では、こころよい気持ちで礼拝するということは、とてもできるものではありません。ところが、きれいに掃除をし、うるわしく仏具がお飾りされたお内仏の前にぬかずきますと、何となく尊いつつましやかな気持ちになってまいります。心は形となって表れると同時に、逆に形は心を育むものでしょう。

しかし、親鸞聖人は、「荘厳」について和讃に、

安楽国土の荘厳は 釈迦無碍のみこ
とにて とくともつきじとのべたもう
無称仏を帰命せよ

（『浄土和讃』真宗聖典第二版574頁）

そして、「無称仏」を左訓に

言葉にてはいひ尽くし難きによりて
無称仏と申すなり

（岩波文庫『親鸞和讃集』28頁）

と訓じておられます。つまり、「お釈迦様におかれても説き尽し難い」ことを「浄土の荘厳」とおさえられています。言葉に尽くせないことが荘厳となったとはどういうことでしょうか。

仏伝によりますと、お釈迦様は、みずからの正覚を得た後、その内容を他の人間に説くべきかどうか考えたと伝えられています。それはなぜでしょうか。おそらく、言葉を身につけることによってさまざまに悩み苦しんでいる人間に対して、それを超えていく道を言葉によって説かねばならないことが大変な矛盾だったからに違いありません。更なる言葉を重ねることによって、もしかしたら人間をより深い迷いに引き入れかねないという恐れの中で、躊躇されたのだと思います。

人間は、言葉によって知識を蓄え、文化文明を生み出し、その一方で悩み苦しみ、時には自分の人生に絶望することさえあります。様々な苦しみの真の解決は言葉の根っ子に何があるのかをたずねていくということでないでしょうか。自分の悩みの原因が知識不足にあると思い込んでいる。そこに私たち人間の抱える大きな暗さがあるのではないでしょうか。言葉で答えを握るというのではなく、言葉の根っ子を問い続けていく。「痛み、苦しみ、悲しみ」の声を、言葉の根っ子、言葉に尽くしがたい隠された背景を、どうしても届けたいという強い願いが懸けられています。その願いが、私に届いたとき、言葉を超えたすがたが「荘厳」という意味をもって、この私に教え育んで下さる事であると思います。

子どもたちへ

石西組専龍寺
前田素子

私は高校生の頃、人間は「破壊する存在」だと考えていました。人間が物を造り出すことによって自然環境を壊し、人間が生きるための営みは生態系を壊し、人間同士が戦い殺し合います。人間は地球を壊すために存在しているのだと考えました。

そのうち、自分は何のために勉強や部活をしているのか？何のために生きているのか？という疑問をもつようになりました。その答えを求めて『氷点』（三浦綾子著）を読んだり、相田みつおさんの本を読んだりしていました。その頃、東本願寺で高校生奉仕団が行われることを知り、参加しました。東本願寺へ行くと、塀に「生まれた意義と生きる喜びを見つけよう」という言葉が掲げられていました。この言葉と出あい、目の前が開けたような、おなかの中に何かストンと落ちたような感覚になり、ここに答えがあると思いました。私は帰敬式を受け、大谷大学への進学を決めました。大谷大学で学べば、自分（人間）とは何か？何のために生きているのか？の答えが見つかる、見つけられると思ったのです。

大谷大学への進学を決めた時、父が大きな白い紙に世界地図を書きながら、仏教伝来について私に話をしてくれました。インドで仏教が生まれ、シルクロードを通って日本へ伝わり、日本でいろいろな宗教に分かれ、自坊は親鸞さんがご開山の浄土真宗だということや、七高僧について話してくれました。細かな内容は覚えていませんが、この時の父の熱意と「お釈迦さまの教えがそのまま伝わったのが親鸞さんであり浄土真宗」「親鸞さんだけに、ほんまのことが伝わったんや」と繰り返していたことは覚えています。

大学で学べば、やがて私の疑問は解決し、人生の目的も明確になり、その後の人生をいきいきと生きることができるだろうと思っていました。しかし、そのようなことにはなりませんでした。「破壊する存在」である人間の中に、自分は含まれていないと思っていたことに気づかされ、これまでの歴史とあらゆる犠牲や苦しみ、悲しみ、痛みに支えられて私が存在していること、そしてその歴史や痛みを知ろうとも見ようともせずに生活している私である事実に気づかされるのです。自分だけは違う、自分さえうまくいけば良い、自分だけいきいき生きられれば良い、と考えていたのです。

十代の疑問は問いとなり、身体の奥深いところに沈み、抱え続けて今に至っています。そして、父が言う「ほんまのこと」とは何なのか、問い続けることとなりました。いま振り返ると、父は私に「真実とは何か」と自分に問い続けることを宗として生きていってほしいと願ってくれていたのではないかと思います。そして父が私に伝えてくれたように、私も伝えてほしいと願っていたのではないでしょうか。このたび原稿を書くにあたり、私は自分の子どもたちへ伝えるつもりで書かせていただきました。

最後に子どもたちへ。自分の「いのち」は自分のものではないことを覚えておいてください。あらゆる生き物は仏の世界から来て仏の世界へ還る「いのち」に生かされていること、自分は「いのち」という大きな流れの中の一滴だということ、「いのち」には思いをこえたそんな世界観があることを、心にとめておいてください。

レポート

出版部会 五村別院「夏中」

出版部会　竹中亜希子

早川直子

8月5日（月）から8日（木）まで、五村別院にて2024年「夏中」が行われた。午前6時から晨朝、午前9時から日中が勤まる。2020年からは午前のみのお勤めとなった。

晨朝の勤行の後、「暁天講座」が行われた。京都教区が主催する教学研鑽機関「共学研修院」で学ぶ8名から、各日1名が30分程度の法話を行う。2023年度に2期生として新たに学び始めた研修院生にとって、別院の「夏中」は、自らの教えの受けとめを伝える大切な研鑽の場でもある。研修生の曽我朋子さんは、「法話をすることで、言葉の意味に深く迫ることができ、自分の疑問と結びつくという実感を得た」と、今後の能動的な学びへの意欲を語ってくださった。

9時からの日中では、勤行、「夏の御文」拝読に引き続き、大広間にて法話が行われた。4名のご講師は、毎日100名に迫ろうかというご聴聞の参拝者に向けて、仏法の味わいを親しみやすく、深く語られた。

4日間の「夏中」に参拝する中で、ご法座を支える方々の姿が特に印象に残った。司会・進行、勤行前の燃香、参拝者の受付、ご接待等は、五村別院を崇敬するご門徒の手によって行われる。その担い手の一つが、48名から成る「五村別院　護持運営委員会」で、長浜第19組のお寺のご門徒が主力である。専宗寺ご門徒の北村政之進さんは、10年ほど前にお役を引き受けて以来、別院の行事執行、清掃などの維持管理に尽力している。現在会長を務める北村さんは、「別院とのご縁は声明講座がきっかけだった。様々な先生との出会いを通し、方々に出向いてご法話を聴聞している」と話された。

五村別院で、お斎などのお世話をされている今荘静子さんは、ある先生からかけられた「あなたが、台所で包丁を持ちながらご法話が聞けるように」という願いを大切にしているという。「夏中」のご法座には、生活と一体になった深い聞法の精神が、生き生きと息づいていると感じた。

「夏中」とは？

陰暦四月十六日から陰暦七月十五日にわたる期間を指す。お釈迦様の時代、この時期は雨季に当たるため、修行僧は托鉢に行かず、寺にこもって勉強をした。これを「安居」という。夏の期間は、「夏の御文」という特別な御文を拝読して法話を行う。本山では、安居（夏安居）を開講しており、昭和三十八年ごろまでは五月から八月まで毎日夏の御文を拝読されていたとのことである。

長浜別院の夏中（七月初旬）と五村別院の夏中（八月初旬）は、地域の人々に「夏中さん」と親しみを込めてよばれており、期間中様々な講師の法話を聴聞することができる。

特に、長浜別院の「夏中さん」の期間中には、地域の商店街において百軒近い屋台が並び、大勢の人で賑わう。元々は、各地から集まって来られる聴聞者を目当てに屋台が連なったのだろうが、今ではこの縁日が「夏中さん」だと思っている若者も多いようだ。これからはお祭りとだけ知っている人たちにも、別院の「夏中さん」を再認識してもらい、仏法聴聞の輪が広がることを願うばかりである。

（参考：旧長浜教区第十二組教化委員会発行リーフレット暁天講座ってなあに？「夏中」ってなあに？）

五村別院暁天講座

大広間での法話

五村別院御堂

五村別院護持委員会の皆さん

レポート

出版部会

有志講を迎えて

出版部会　藤野 勝

昨年より再開された「有志講」が私の地元で開講されました。次年度会所住職が主事を務めるという事で慣れない中（二回目）、なんとか務めさせていただきました。

今年で一四〇回を迎える有志講とは、近江第二十六組（滋賀県高島市）内の九ヵ寺で毎年開講されてきた聞法の場であります。明治十三年（一八八〇年）から始まった講の歴史の中で二度の戦争（日露戦争、第二次世界大戦）と新型コロナウイルス感染対策で欠講を余儀なくされましたが、令和五年より再開できた事は大変喜ばしい事であります。最初期は十一日間で始まり、現在は二日間（四座）となりましたが、所属寺院並びに門徒方の良き聴聞の機会となっています。高島市内には高島秋講をはじめ幾つかの講が地域ごとに自主運営されています。時代の変遷と共に開講日数や時期が見直されてきましたが、途絶えることはなく「厳しい状況ではあるが相続していく」気概は非常に強く感じられます。

令和六年度は七月十三日、十四日に真光寺様を会所として開講されました。暑い時期でしたが多くの方に聴聞していただき、大変有意義な二日間になったと思います。講師に西稱寺（門真市）住職で「獅子吼の会」所属の宮部渡師をお迎えして、講題「円満の徳号専称を勧む」のもとでお話しいただきました。正信偈の言葉を中心に日頃見落としがちな大切な我々にかけられている「本当の願い」とは何か、分からないけれども大事なもの、聴聞を通して私たちの「どうとらえるかという心」が変わっていく、「良し悪し」に囚われる自身のあり方、お念仏の教えを感知していく場として有志講をはじめ、今まで大切に相続されてきた聞法の場が常に身近なところにある有難さに気付かされました。自分にとってどう思うか、自分自身の養分として吸い上げるかが問題となってくるといった、今現代の生活に直結した法話を頂きました。

来年度は自坊での開講となりますが、若年者層への浸透が近々の課題と感じます。有志講を迎えるにあたり、真光寺の皆様には大変お世話になり有難うございました。

男と女の平等って、なに？

出版部会　井上 至

『仏説無量寿経』に説かれる四十八願のうち、第三願・第四願はそれぞれ「悉皆金色の願」・「無有好醜の願」と呼ばれる。法蔵菩薩は浄土に生まれる人々が皆、金色に輝く身となること、そしてそこに美しい、醜いという違いがないことを願っている。ここから考えられることは、誰しもが尊い存在であり、そこに何の差異もないということではないだろうか。

こうした二つの内容が本願として説かれているということは、『仏説無量寿経』成立の時代より、人間はその存在に対して美醜のみに限らず、様々な違いで差異をつけていたのであろう。

「平等」という言葉を言い当てているのは、「悉皆金色」であり、「無有好醜」ということではないかと受け止めている。

レポート

出版部会 高島秋講

出版部会　比叡谷 真

去る八月二十二日から二十六日にかけて、近江第二十六組法泉寺様にて、高島秋講（以下「秋講」）が開筵された。

秋講は、北部（近江第二十五西組）・中部（近江第二十六組安曇川以北）・南部（近江第二十六組安曇川以南）の三発起頭が順番に担当し、各発起頭内で会所寺院をローテーションしている。新型コロナウイルス感染症の影響で、各発起頭とも一回休止したが、昨年から旧に復し、今回、自坊の所属する中部発起頭としては、六年ぶりの開筵となった。

期間中、午前は講義、午後と夜のお座は法話の時間で、講義は伊東恵深師（元同朋大学准教授）、二日目までの法話は伊東師、三日目以降の法話は英月師（真宗佛光寺派大行寺住職）がそれぞれ担当された。

秋講は歓喜光院乗如上人（一七四四～一七九二年）の頃始まったとされており、伝統ある御仏事として、高島の地で大切に相続されてきたが、十五年ほど関わるなかで、個人的には多くの課題を感じている。なかでも、秋講において伝統的に所化と称している僧侶の姿勢が問われていると思う。

先述のように秋講は僧侶・門徒の仏法聴聞の場であるのだが、本願念仏の教えを聞くということの中身として先輩方から伝えられてきた、お念仏申して南無阿弥陀仏のいわれを聞くということのうち、お念仏申すことがおろそかになり、ただの講演会・勉強会になっているようにも感じる。お念仏申すことを省略あるいは簡略化して教えを聞くということは成立しえないはずである。

その点から、秋講の午前・午後のお座は、御経短念仏回向という本来的な永代経の格（期間中各一座の歓喜光院殿および物故者追弔会の法要については より厳重）で勤まっており、まずは所化が適切に荘厳を整え適正に勤行する、すなわちお念仏することが求められている。所化のほとんどは兼職者あるいは元兼職者であることから、秋講はそのことをともに学びあい研鑽することができる本当に貴重な場である。先輩方のご苦労によって私たちにまで伝わった秋講だからこそ、「流を酌んで本源を尋ぬる」（『報恩講私記』真宗聖典 第二版八九七頁）ことを大事にしていきたい。

六年ぶりに担当発起頭として儀式・荘厳関係を担当して、発起頭内に同世代の所化が増えたからか、内陣拵えや勤行作法などで、ともに学びあう雰囲気の萌芽も感じられた。より若い世代の参加がないことは大いに気がかりではあるが、まずは今関わっている私たち自身が、お念仏申して南無阿弥陀仏のいわれを聞いていく、つまり僧侶の本分を尽くすことから、秋講という場の相続を始めたいと思う。

来年は近江第二十六組（南部発起頭）妙琳寺様、再来年は近江第二十五西組（北部発起頭）長光寺様が会所をお務めになり、三年後、中部発起頭の次回会所は、私がお預かりするお寺である。本願念仏の教えをたずねる生き方が伝統されていく場が今後ともひらかれ続けるよう、少しずつ準備していきたい。

2024高島秋講
Webサイト

京都教区 10月の教区事業			
1日（火）	10:30～15:30	坊守会 一日研修会	岡崎別院
7日（月）	16:00～17:00	新教区発足式	教区会館 2 階 大講堂
9日（水）	9:30～15:30	坊守会 基礎講座（Zoom 併用）	教区会館 2 階 大講堂
25日（金）	19:00～21:00	月例部落差別問題学習会	大谷会館 講堂（長浜別院）

京都教区 10月の教区諸会議			
1日（火）	13:30～16:30	教化本部会	教区会館 2 階 大講堂
7日（月）	14:00～16:00	教区会（臨時会）	しんらん交流館
8日（火）	13:30～16:30	教化本部 企画室 会議	教区会館 2 階 大講堂
15日（火）	16:00～19:00	教化本部 出版部会 編集会議	Web 会議（Zoom）
23日（水）	13:30～16:30	教化本部 出版部会 編集会議	Web 会議（Zoom）
25日（金）	13:00～15:00	教化本部 青少幼年部会 会議	Web 会議（Zoom）

教務所からのお知らせ

得度受式者

二〇二四年九月六日

・長浜第十九組 准願寺　冨永 悦子
・近江第十一組 養照寺　髙木 須美子
・若狭第二組 正覺寺　浪川 千寿子

住職任命者

二〇二四年八月二十八日付

・敦賀組 高雲寺　北口 ジェニファー マリン
・近江第二組 善福寺　竹村 宏之
・近江第五組 長敬寺　武田 真吾

敬弔

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

・長浜第十二組 正業寺
前住職　橘 香正　九十四歳
二〇二四年八月十七日

・近江第三組 乗圓寺
住職　武村 了賢　八十八歳
二〇二四年七月二十一日

・近江第九組 浄心寺
坊守　桃園 悠紀子　九十六歳
二〇二四年七月二十九日

・丹波第三組 行雲寺
前坊守　岡村 智子　九十一歳
二〇二四年七月一日

〔寺院教会番号順 敬称略〕

教区だより 表紙写真大募集!!

本誌表紙写真を大募集いたします！テーマは宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」です。ご応募は、京都教務所（担当：赤松）まで。お待ちしております！

教務所・教務支所閉所のお知らせ

・2024年10月4日（金）

所員ミーティングのため、教務所・教務支所を閉所いたします。

教務支所閉所のお知らせ

・2024年10月7日（月）

臨時教区会、並びに新教区発足式のため、教務支所を閉所いたします。

依頼 「令和六年能登半島地震」災害に対する救援金の勧募について

去る一月一日「令和六年能登半島地震」が発生し、能登地方を中心に広域にわたり未曾有の被害をもたらしました。このたびの地震の影響を受けた北陸の地は真宗門徒の多い地域で、とりわけ震源地である能登地方は、近年、度重なる地震により何度も苦しい思いをされていました。

そのような中で、このたびの巨大地震の発生により、多くの寺院・ご門徒が甚大な被害を受け、大変深い悲しみと不安の日々を過ごされております。

つきましては、何卒ご理解を賜り、有縁の方々にもお声がけいただき、可能な限り救援金をお取り纏めの上、同封の郵便払込用紙にて送金くださいますようお願い申し上げます。

また、このたびの被害状況から、京都教区としての救援金支援は、複数年度間に亘る必要があると考えております。今後の継続支援としての勧募は情勢を検討しながら改めてお願い致しますので、引き続きご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

京都教区救援金総額

二〇二四年 九月 十三日 現在

29,537,841円

京都教区別院 10月の行事予定

5日（土）	13:30～16:10	五村	五日講（教如上人祥月命日） 法話 老泉俊樹 師（大垣教区 圓超寺）	五村別院
5日（土）	12:00～13:00	赤野井	定例法要（教如上人御命日） 法話 中川眞 師（別院輪番）	赤野井別院
6日（日）	14:00～16:00	伏見	声明作法講座 法話 浅井誠 師（山城第3組 皆演寺）	伏見別院
8日（火）	13:30～16:30	山科	同朋の会 法話 磯野惠嗣 師（山城第1組 新道寺）	山科別院
10日（木）	14:00～16:30	伏見	同朋会 御文輪読	伏見別院
13日（日）	10:00～11:30	岡崎	三日講「味読正信偈」 法話 福田大 師（別院輪番）	岡崎別院
14日（月）	13:00～16:30	大津	報恩講 13:00 讃仰音楽法要、14:00 逮夜 法話 犬飼祐三子 師（名古屋教区 正林寺）	大津別院
15日（火）	7:30～12:00	大津	報恩講 7:30 晨朝、10:00 日中 法話 犬飼祐三子 師（名古屋教区 正林寺）	大津別院
22日（火）	10:00～15:30	長浜	報恩講 10:00 戦没者追弔法会、13:00 初逮夜 法話 美濃部俊裕 師（長浜第24組 来入寺）	長浜別院
22日（火）	19:00～21:00	伏見	親鸞教室 法話 藤原正寿 師（大谷大学准教授）	伏見別院
23日（水）	7:00～15:30	長浜	報恩講 7:00 初晨朝、10:00 初日中、13:00 中逮夜 法話 堀澤俊行 師（長浜第13組 念願寺）	長浜別院
23日（水）	10:00～12:00	岡崎	報恩講 法話 竹橋太 師（本廟部）	岡崎別院
24日（木）	7:00～15:30	長浜	報恩講 7:00 中晨朝、10:00 中日中、13:00 結願逮夜 法話 藤井善隆 師（大阪教区 即應寺）	長浜別院
25日（金）	7:00～12:00	長浜	報恩講 7:00 結願晨朝、9:00 日中法話、10:00 結願日中 法話 藤井善隆 師	長浜別院
25日（金）	14:00～16:30	山科	八代講 法話 平原晃宗 師（山城第5組 正蓮寺）	山科別院
26日（土）	13:30～16:00	赤野井	報恩講 初逮夜 法話 名和達宣 師（教学研究所）引き続き初夜（御伝鈔）	赤野井別院
27日（日）	8:00～16:00	赤野井	報恩講 8:00 晨朝、10:00 日中、13:30 逮夜 法話 名和達宣 師（教学研究所）	赤野井別院
27日（日）	14:00～16:00	伏見	ご命日のつどい 法話 友澤秀三 師（大阪教区 南照寺）	伏見別院
28日（月）	10:00～15:30	五村	報恩講 10:00 戦没者追弔法会、13:00 初逮夜 法話 有賀尚子 師（長浜第13組 光了寺）	五村別院
28日（月）	8:00～12:00	赤野井	報恩講 8:00 晨朝、10:00 日中 法話 名和達宣 師（教学研究所）	赤野井別院
29日（火）	7:00～15:30	五村	報恩講 7:00 初晨朝、10:00 初日中、13:00 中逮夜 法話 黒田進 師（長浜第14組 満立寺）	五村別院
30日（水）	7:00～15:30	五村	報恩講 7:00 中晨朝、10:00 中日中、13:00 結願逮夜 法話 池田徹 師（三重教区 西恩寺）	五村別院
31日（木）	7:00～12:00	五村	報恩講 7:00 結願晨朝、9:00 日中法話、10:00 結願日中 法話 池田徹 師	五村別院

教務所・教務支所閉所のお知らせ 10月4日(金) ※所員ミーティングのため、教務所・教務支所を閉所いたします。

教務所支所閉所のお知らせ 10月7日(月) ※臨時教区会、並びに新教区発足式のため、教務支所を閉所いたします。

京都教区 公式SNSあります

公式 SNS で更新情報をお知らせします。
下記 QR コードからご登録よろしくお願いします！

LINE

Facebook

Instagram

編集後記

「荘厳」には、「心から形へ」と「形から心へ」の二つの方向性があるとのお話（2頁）。編集中、委員たちから「なるほど」との声。日頃ぼんやり感じていたことをすっきりと言葉にしてくださった。

特集面では各地に聞法の場が連綿と開かれていることを再確認。都合がつかない、時間がないと足踏みしている場合ではない。寸暇を惜しんで、その場に足を運ぶことが、次世代への相続につながると感じた。

（出版部会　竹中 亜希子）

今月のことば

自分が破られたことだけが相手に通じていくんです（柘植闡英『羅網（らもう）』全推協 第62号より）

【表紙の写真】「真宗本廟（東本願寺）仏前結婚記念参拝式」（小山大来 山城第2組 圓重寺）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 教区だより 第413号　真宗大谷派 京都教区 Webサイト https://www.k-kyoku.net ▶
［発行人］宮戸弘（真宗大谷派京都教務所長）［発行所］真宗大谷派京都教務所 ［発行日］2024（令和6）年10月1日
〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入 Tel 075-351-5260 Fax 075-351-5256 Mail kyoto@higashihonganji.or.jp